



『ジェロムスキ短篇集』  
Opowiadania Stefana Żeromskiego  
小原雅俊(監訳)  
〈ポーランド文学古典叢書〉12  
未知谷 2024.11



portrait of S. Żeromskii  
by E. Niewiadomski 1900

「ピョートル博士」を翻訳して

私の翻訳作品が活字になるのは『ポケットのなかの東欧文学』（成文社 2006）以来2度目になります。ポーランド語読解能力はその時より向上したと思いますが、日本語表現能力はお粗末なまま、かなり小原雅俊先生に助けいただきました。最初、何を訳そうかとネットで読めるジェロムスキ作品にざっと目を通しました。その中で私の心にヒットしたのが「ピョートル博士」でした。

介護・家業と翻訳と

現在、私は千葉から山口に移住し、自分の親の介護と家業の手伝いをしています。親が高齢で、もう代替わりすべき時期だと思い、東京にいる跡継ぎの兄にいつ帰って来るのか打診するも「今は帰れない」の一点張り。父は「お兄ちゃんが帰って来るまで頑張る」「自分が死んだら帰って来るじゃろう」と兄の帰りを待ちわびています。「ピョートル博士」では主人公のドミニク・ツェジナ氏が息子ピョートルの帰還を待ちわびており、私はドミニクと父、ピョートルと兄を重ねてしまい、「これはうちの話だ、これにしよう」と決めました。

選んで訳し始めたものの、家業に加えて母の骨折や入院、父を連れての病院通いでまとまった時間を取れることは少なく、締切を過ぎてはまだ出来上がらず、小原先生やポーランド人の友人に助けられながら何とか校了にたどり着きました。

言い回しが難解でつい分かりやすく意識してし

まうのですが、文学作品の場合は難解なものは難解に訳さないといけませんし、そもそも私の頭の中の辞書には難解な日本語の語彙が無く、お恥ずかしい話、小原先生のアドバイスを頂いてもその語を辞書で引かないと意味が理解出来ないという事態も。世の中の翻訳に携わり数々の本を出されている方々の優秀さとご努力にただただ敬服する次第です。

この作品の中には没落シュラフタで苦勞して息子のために働いてきた父と、留学を経て高学歴の子の考え方の違いがポーランドの農村や鉱山の風景とともに描かれています。子は親の言う事を聞くもの、帰ってきて跡を継ぐもの、と信じる親世代が近代的な考えに染まった子世代から考え方を否定され継承を拒否され失意に沈む。これは私の実家に限らず世界中の普遍的な出来事のようにですが、消滅の危機が迫る過疎地域に住む者としては、人口減少と相まってとても複雑な心境です。

(前田理絵、会員)



『いまは、ここがぼくたちの家：  
ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』  
バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)  
田村和子(訳)  
彩流社 2024.12

Teraz tu jest nasz dom.  
Barbara Gawryluk,  
Maciej Szymanowicz,  
Literatura 2016



戦火に追われ、ウクライナからポーランドに逃れた子どもたちは、「せんそう」や国外避難、新しい土地での生活をどのように感じたのでしょうか。この絵本は、ウクライナ東部のドンバス地方から 2014 年にポーランドに避難し、難民となったバラノフスキー一家の実話をもとにした物語です。平和がどれほど尊いか、子どもたちの気持ちが痛いほど伝わってきます。

ウクライナから

ドンバス地方で建設会社に勤めるポーランド人の父親とウクライナ人の母親、長男で小学3年生の

ローマン、小学ゼロ年生(幼稚園年長組に当たる)の弟のミコワイ、妹のナタリア(3つ)は、近くに住む祖父母とともに楽しく平和な日常を送っていました。

いつも遊びに行く祖父母の台所は、ボルシチや